

神の武具を身につけて(2) 信仰の盾

エペソ 6:10-16

人生は戦いの連続です。勝ち負けが無いとしても向き合わなければならない現実があります。もちろん信仰者にとっても戦いがあります。クリスチャンになってから悩んだことは何一つ無いという方はおられないでしょう。クリスチャンの場合この戦いは霊的な戦いです。しかも、この霊的な戦いには人間の力や人間の武具ではなく、神の力により、神の武具で武装して向かわなければなりません。

このエペソ人への手紙には、神が備えておられる六つの武具があげられています。よく読むと最初の三つと残りの三つでは言葉遣いが違っていています。前回話しました最初の三つの武具、「真理の帯」、「正義の胸当て」、「平和の福音の備え」は「締めなさい」「着けなさい」「はきなさい」とつまり「身につけなさい」と言われています。しかし残りの三つの武具、「信仰の盾」、「救いのかぶと」、そして「御霊の剣」は、「取りなさい。」と言われています。ちょうどスポーツ選手がまずロッカールームでユニフォームに着替えたり、靴を履いたりして身支度を整えてから、野球でしたらバットやボールを手にするようなものです。

これは、信仰の戦いにおいても同じです。聖書は、「腰には真理の帯を締め、胸には正義の胸当てを着け、足には平和の福音の備えをはきなさい。」と言ってから「これらすべての上に、信仰の盾を取りなさい。」と言っています。まず身支度です。「真理の帯」とは信仰の確信です。「正義の胸当て」とは「神の正義と愛、かみのまことと恵みをもって受け止めてゆく力」、「平和の福音の備え」とは「いつでも福音を伝えるための準備ができています」ということです。身支度が不自由なまま、戦いに出ても良い結果を残すことは出来ません。それこそ行く時よりも大きな傷を負う可能性があります。みなさんはいかがでしょう？ そのようなことに思いを馳せながら後半のみことばを読んでゆきたいと思います。

きょうは後半3つの中でも「信仰の盾」について学びます。ギリシャ語の「盾」という言葉は扉(ドア)という言葉から出たものです。当時の盾は幅80センチ、長さ120センチもあって、実際に、ドアのようなものでした。兵士たちが手にする盾は木でできていました。それを動物の革で覆い、実際に使う時には、盾を水に浸して革に水分を含ませます。すこし重くはなりますが、これで、敵が打ち込んでくる火の矢を消すことができます。敵が打ち込んでくる火の矢というのは、とても威力のあるもので、鉄の矢尻にタール(やに)をつけ、それを燃やしたものです。矢によって相手を傷つけるだけでなく、火傷を負わせます。この矢は兵士が身につけている胸当てでは防ぎきれません。盾によって全身をカバーしなければならないのです。ですから盾とはそれを用いて攻撃するというよりも自分の身を守るために手に取るということです。イエス様は主の祈りを教えられる中で「私たちに試みにあわせないで悪からお救い下さい」マタイ 6:13と祈りなさいとおっしゃいました。サタンと堂々と戦えとはおっしゃっていません。敵がどんなに手ごわいかイエス様はご存じだからです。しかしそのためには自分がどれほど弱い者であるかを認め、「助けてください」「救ってください」「憐れんでください」と言う必要があります。

さて信仰の戦いにおいて、神の敵が放つ火の矢にはどんなものがあるのでしょうか。まず第一に使徒たちの時代にはそれは迫害という形でやってきました。多くの人が財産を奪われ、鞭打たれ、祖国から追放されました。さらにいわれのないことで非難されることは、まるで火の矢で体を差し抜かれるほど痛いものです。激しいことば、きついことば、噂話そういったものが人の心を傷つけます。さらにあなたのことばによって傷つけられたとさらに傷口が広がります。そういうことがたび重なると、何をしてもいやになり、失望、落胆します。また何に対しても無感動、無関心となります。信仰の敵はそれを狙っています。度重なる攻撃によって失望させ、信仰を失わせようとするのです。失望は敵がしかける恐ろしい火の矢のひとつです。

別の火の矢は甘い誘惑かもしれません。暗やみに飛び交う火の矢はほんとうは恐ろしいものですが、見た目にはきれいに見えることもあります。そのように、敵は「あなたの知恵も、力も素晴らしい。その知恵と力で努力してみなさい。そうすれば成功する。」とささやき、神に頼り、神に導きを求めて、神のた

めにものごとを行うことよりも、自分の力で、自分の願いどおりのことを、自分のために実現するようにとそそのかすのです。そしてクリスチャンを神から引き離そうとするのです。自分の願いが自分の努力で果たされていくのを見るのは、楽しいことです。そうしたことも必要なかもしれませんが、それが自分の力だけでできているように感じ、自己実現が主な動機となっていくなら、それによって、知らず知らずのうちに神から離れて行く危険があります。何かに一所懸命になっている時は、心が燃えているように感じるのですが、もしかして、心が燃えているのではなく、敵の放った火の矢で燃え、踊らされていることはないかと反省してみる必要もあります。神以外のものでいくら燃えても、それは私たちが燃え尽きてしまうだけです。順調な時ほど誘惑が多いのです。誘惑の火の矢にも警戒しましょう。

しかし、クリスチャンに決定的なダメージを与えるのは「疑い」の火の矢です。クリスチャンは迫害や中傷を乗り越えて強くなります。あからさまな誘惑は、それを退けることによって、かえってその人を強くします。巧みな誘惑も、それを見破り、退けることによって、クリスチャンを揺るぎないものにします。しかし、疑いはクリスチャンを駄目にしてしまいます。クリスチャンが苦しみの中で耐えられるのは、神を信じるからです。神がすべてのものの主であり、この苦しみを栄光に変えてくださる、自分の身に起こった悪をも善に変えてくださる、と信じればこそ、クリスチャンは苦しみを乗り越え、誘惑を退けることができるのです。「神がすべてのことを働かせて益としてくださることを知っている」ので切り抜けます。ところが、そこに疑いが入って来ると、クリスチャンもまた失望の中に投げ込まれ、そして、その失望から救ってくれるものなら何にでも手を出すようになり、誘惑に無防備になります。サタンがアダムとエバに最初に言ったのは、「園の木のどれからも食べてはならないと、神はほんとうに言われたのですか。」(創世記 3:1) ということばでした。「神は、ほんとうに言われたのですか。」と、神を疑わせることだったのでした。

こうした火の矢を防ぐのが「信仰の盾」です。この場合「信仰」という言葉にはふたとおりの意味があります。ひとつは、「信仰の内容」で、もうひとつは「信仰の行為」です。「信仰の内容」というのは、私たちが「キリスト教信仰」という時に使うように、何を信じるかをまとめたものです。主イエス・キリストは、私たちに何を信ずべきかを教え、使徒たちがそれを伝え、それは使徒たちから弟子たちへ伝えられてきました。この信仰は歴史的に教会によって保たれ、現代の私たちに手渡されました。それで、この信仰は「教会の信仰」とも呼ばれます。信仰と生活の誤りのない基準は聖書ですが、聖書を正しく知り、信じるためには「教会の教え」が必要です。聖書は、世界第一のベストセラーですから、教会以外のところでも読まれたり、解説されたり、利用されたりしています。しかし、そのすべてが聖書を正しく解釈しているわけではありません。聖書の中心的な真理が無視されたり、曲げて教えられていることが多いのです。それはどの時代にあってもそうでした。教会によって解き明かされる聖書の教えが人を救い、人を守るのです。教会は、その教えを「使徒信条」(原型は2世紀後半)や「ニカイア信条」(325年)などに要約し、説教によって教え、人々は礼拝の賛美や祈りのうちにそれを告白してきました。それらはいわばキリスト信仰のエッセンスです。教会と使徒信条等の教えが深紅の盾となるのです。聖書の教えに対して歴史の中で絶え間なく疑問、中傷、批判がなされてきました。しかしその中でこれこそキリスト教のすべてというものが凝縮されているのです。これを教会の中で保ってきたという点が大切です。多くのキリスト教の異端と言われるグループの創始者はもともと忠実な教会の信徒であったと言われます。どんなにすぐれた聖書の話、感動的な聖書の話が出来たとしても教会と結びついた働きであるかどうかはより重要なことです。常にサタンの攻撃にさらされるわけですので個人の力や賜物では太刀打ちできません。使徒信条等の「教会の教え」について「これを守れ、そうすれば、これがあなたを守る。」と言われますが、まさにその通りです。教会の教えを守る者はそれによって守られるのです。私たちに伝えられた「教会の信仰」は私たちを守る盾です。

第二に「信仰の盾」の「信仰」とは、「信仰の行為」、つまり、私たちの神への信頼を指します。聖書は、神が信じる者の「盾」であると教えています。「主はわが巖わが砦わが救い主身を避けるわが岩わが神。わが盾わが救いの角わがやぐら。」(詩篇 18:2)「神その道は完全。主のことばは純粹。主はすべて主に身を避ける者の盾。」(詩篇 18:30)「まことに神である主は太陽また盾。主は恵みと栄光を与え誠実に歩む者に良いものを拒まれません。」(詩篇 84:11)ということばが聖書に繰り返されています。

詩篇 91:4 に、「主はご自分の羽であなたをおおいあなたはその翼の下に身を避ける。主の真実は大盾また砦。」とあります。「教会の教え」を知り、守ることは大切なことですが、それがたんなる知識に留まって、神への信頼につながらなかつたら、私たちは神を「盾」としていることにはなりません。「信仰」と「真実」という言葉は、ギリシャ語では同じ言葉が使われています。信仰は神の真実にもとづいています。いつでも神の真実を覚え、神を賛美し、感謝できればよいのですが、ものごとがうまくいっているときは、そのことで有頂天になって、神の真実を考えることをしない場合が多いのです。苦しみを与えられて「神さま、あなたは私を祝福すると約束されたではありませんか。あなたの真実はどこにあるのですか。」と神の真実に目を向けるようになってしまうことがしばしばです。それで多くの人は苦しみを通して信仰を与えられ、強められてきました。信仰は、神の真実を求めることから始まり、みことばの中で、祈りの中で、キリストの十字架のもとで、神の真実と出会うことによって育ちます。苦しみの日にも、喜びの時にも、どんな場合でも神が真実であることを確認すること、神の完全な真実にこたえて、私たちの精一杯の真実をささげていくことが信仰です。

「主の真実、大盾であり、とりでである。」大盾は、その背後に身をかがめるものです。そのように神のもとに身をかがめ、神により頼むとき、神が私たちの大盾となってくださるのです。「大盾」とは、神の真実であり、神ご自身です。この神により頼むことが「信仰の盾」を手にする事なのです。

主イエスこそ大盾となって本来私たちが受けるべき罪の罰を身代わりに受けてくださいましたし、今も受け続けてくださっています。キリストの十字架の死は永遠に信じる者に有効です。神のイエス・キリストによって示されたご真実に、私たちは真実をもって答えてゆこうではありませんか。祈ります。